

2014

人権週間ギャラリー展

せいしんこうりん

誠信交隣を願って

日朝・日韓関係の歴史と現在

2014

12.10[水]—2.2[月]

2015

真宗本廟(東本願寺)

参拝接待所ギャラリー(1階・地下1階)

監修：仲尾 宏氏(京都造形芸術大学客員教授)

水野 直樹氏(京都大学人文科学研究所教授)

ムン・ゴンフイ 文 公輝氏(多民族共生人権教育センター事務局次長)

主催：真宗大谷派(東本願寺)解放運動推進本部

お問い合わせ：075-371-9247



真宗大谷派
東本願寺
sinshu Otani-ji
otani-ji.com

洛中洛外図屏風【今井町本】「部分」(個人蔵/写真提供：京都文化博物館)

開催にあたって

真宗大谷派では、毎年人権週間にちなみギャラリー展を企画しております。本年は「誠信交隣せいしんこうりんを願って一日朝・日韓関係の歴史と現在」をテーマに開催いたします。

古来から朝鮮半島と日本列島は「一衣帯水いちいたいすい」の隣国であり、50キロたらずの海峡をはさんで人や文物の活発な交流がありました。その交流を担ってきた渡来人の子孫たちは、先進文化をもたらすと同時に寺院の建立、仏典の普及にも大きな力を発揮しました。聖徳太子の教育には高句麗と百済からの渡来僧があたり、学んだ仏の教を『三経義疏さんぎょうぎしょ』にまとめたといわれています。長い交流の間には苦難の時もありました。交流を断ち切ったのが豊臣秀吉による文禄・慶長役ぶんろく・けいちょう(韓国・朝鮮では壬辰倭乱じんしんわらん)です。京都東山に残る「耳塚(鼻塚)」はその悲惨さを現在に伝えています。当時、少なからぬ僧侶も「従軍僧」として動員され、浄土真宗においても釜山に寺を開き、布教にあたりました。

その後、江戸時代には「朝鮮通信使」が12回も来訪され、対等な立場で「誠信(互いに欺かず、争わず、誠実と信頼を基本とした交流)」をかわす平和な関係が200年あまり続きました。東本願寺の浅草別院、難波別院にも通信使一行が宿泊し、交流の歴史が残されています。

近代以降、日本政府の対外拡張政策のもとで朝鮮半島を植民地にするという悲惨な歴史がありました。その罪責は重く深く、現在も日本社会に大きな爪痕を残しております。当時、大谷派も「海外開教」の名のもとに布教所、別院を設置し教線拡大を推進しました。

このように、交流の恩恵の遺産は日本社会のいたるところにあると同時に、苦しみ、悲しみが刻まれている事柄・場所が各地に残されています。またヘイトスピーチに見られるように、在日コリアンに対する差別が厳しさを増す現在、朝鮮通信使に学ぶことは今日的な意味を持っていると考えます。私たちは歴史に学び、その教訓からこれからの未来を切り拓いていく必要があります。

同朋会運動が進められて50年が過ぎましたが、私たちはこの間、人間解放を願う方々をはじめ、差別を受けてきた多くの人たちから「同朋」という内実を厳しく問われてきました。さらには靖国問題により、教団の歴史が照らされ、国家に呪縛された信仰からの解放が求められてきました。近年50年の歴史は、同朋教団の名にかけて、差別問題、靖国問題からの問いかけと願いに応答しようしてきた歴史でありました。今回のギャラリー展を通して、ともどもに人間解放の道を歩みだすひとりの人間の誕生が願われています。

2014年12月

真宗大谷派宗務総長 里雄 康意

本展の開催にあたり、所蔵者をはじめ、関係諸機関、関係諸氏のご協力、ご助言に加え、展示協力をいただきました。ここに記して、心よりお礼申し上げます。(順不同・敬称略)

高德寺 久留米教区
妙満寺・京都市左京区
京都国立博物館
鍋島報効会
京都大学総合博物館
九州国立博物館
国立公文書館
喜多一裕
光明寺・岐阜市
京都府立総合資料館

高月観音の里歴史民俗資料館
大日本大韓国民団
東九条マダン実行委員会
中山和弘
大阪人権博物館
アクティブミュージアム女たちの戦争と平和資料館
アジア歴史資料センター
仲良くしようぜ!パレード
在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会(こるむ)

一 古代・中世の日朝・日韓関係と豊臣秀吉の侵略戦争

豊かな恵みを人びとにもたらした水田耕作がはじまった弥生時代の大昔から日本列島には朝鮮半島から多くの人びとが渡来してきました。この人びとは灌漑技術だけでなく、青銅器、製織、家畜の飼育などさまざまな先進文化をもたらしました。後には、漢字、儒教や仏教の教典も彼らによって伝えられました。聖徳太子（厩戸王）の教育には高句麗や百済からの渡来僧があたり、太子は彼らから学んだ仏の教えを『三経義疏』という書物にまとめた、といわれています。また広隆寺の弥勒菩薩像はおそらく新羅から伝来されたものか、あるいは渡来してきた仏師によって作られたもの、といつてよいでしょう。

このように古来から朝鮮半島と日本列島とをへだてる海峡はわずかに50キロたらず、人や文物の交流に大きな役割を果たしてきました。「一衣帯水」とはこのような近い距離にある関係を指します。飛鳥時代から奈良時代にかけて、これらの交流を担ってきた渡来人の子孫たちが寺院の建立、仏典の普及に大きな力を発揮したことはいうまでもありません。京都に都をおいた桓武天皇の母は百済の王族の出身であり、またこの山背盆地を開拓した人は秦氏や八坂氏といった渡来系の氏族でした。そのころ朝鮮半島北部には渤海という国ができ、その使節も平安京に幾度となく訪れ、また日本からも使者が渤海国を訪問しました。菅原道真や空海もかれらと交流しました。比叡山延暦寺を創建した最澄もまた渡来系の氏族の出身でした。

中世になると、京都に武家が開いた室町幕府がおかれます。三代将軍足利義満は中国と国交を開き、貿易をはじめただけでなく、朝鮮王朝とも積極的に交流をはじめました。はじめは朝鮮王朝から主として「倭寇」という海賊の取り締まりを要求する使者が朝鮮王朝からやってきていたのですが、やがて両国の友好を深める「通信使」が京都を訪れ、足利将軍が彼らと謁見することになりました。日本からは「日本国王使」とよばれた使節がたびたび朝鮮王朝の首都漢城（いまのソウル）を訪問し、仏典の集大成である「大蔵

経」を始めとする仏教経典や仏具、仏画、そして高級繊維製品などをもらってかえるようになりました。商人たちの活動もさかんで、博多（福岡市東部）には「唐人町」ができ、おおくの中国人や朝鮮人がそこを根拠地として交易しました。また対馬は朝鮮半島南部の港三か所に居留地をあてがわれて交易を展開しました。

このような交流関係を断ち切ってしまったのが豊臣秀吉が発動した戦争でした。日本では文禄・慶長役、韓国・朝鮮では壬辰倭乱（1591～98）とよびます。

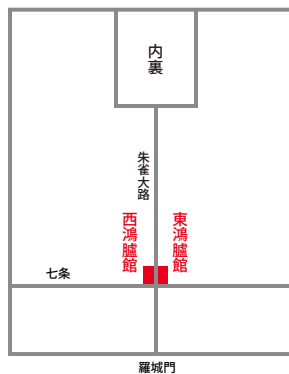
秀吉は国内戦で戦ってきた部下の大名たちに与える恩賞のために新しい領地を海外に求めたのが開戦の主たる要因だった、といわれています。そのことは武将たちに与えた秀吉の書状が物語っています。そして2度にわたり、14～15万人の武士や下働きの人民を動員しました。加藤清正は出陣の命がくだると京都の本国寺で祈祷を受けて出陣していきました。また少なからぬ僧侶も「従軍僧」として動員されました。当時、僧侶の多くは医師を兼ねていたので、戦場に派遣されたのです。また肥前（佐賀県）にあった真宗のお寺などは釜山に寺を開き、布教にあたっていました。豊後臼杵の安養寺の僧・慶念も動員されて朝鮮半島にわたった一人でした。かれはその間のことを『朝鮮日日記』として記録していました。この書は戦場の悲惨な光景、無辜の民衆を日本に拉致連行する日本の商人たちや財宝を奪い尽くす武士たちの姿をありありとのべています。

この戦争の中でも残酷をきわめたものは「鼻削ぎ」でした。この行為は日本軍に反抗する朝鮮の兵士や民衆に対する刑罰として行われました。現在、京都市東山区にある「耳塚」は正しくは「鼻塚」とよぶべきものです。そのことは当時、秀吉の側近だった相国寺の西笑承兌という僧侶が書き残しています。江戸時代の中頃から、いつのまにか「耳鼻を削いだ」という伝えかたに代わり、今日のような呼称にかわってきたのです。

平安京と渤海使節



「此付近 東鴻臚館址」石碑
京都市下区西



平安京略図
朱雀大路と七条の交差点
に位置する鴻臚館

8世紀から10世紀にかけて、朝鮮半島の北部から旧満州にかけて渤海という国が建国されました。高句麗を継いだ国家です。渤海から日本には数多くの使者が日本海をこえてやって来ました。また日本からも使者がこの国へ赴きました。そして互いに特産の文物を交換しました。日本側でとくに珍重されたのは北の世界に住む動物の毛皮でした。菅原道真はこの渤海国へ送る外交文書を作成し、また彼らの宿舎である鴻臚館を訪れて使節一行と交流しました。872年のことです。道真は宴のさなか、自分の衣を脱いで渤海の大使にかけてあげ、ふたりの気持ちはこんなに良く分かり合えるのに、互いの言葉を直接に理解できないのはとても残念だ、と書き残しました。なぜならこの時代の交流はすべて漢字による筆談だったからです。

悲慘をきわめた朝鮮の戦場



「朝鮮軍陣図屏風（蔚山籠城図）」部分

所蔵および写真提供：鍋島報効会

再度の戦乱も日本軍は一時、南部地域を占領しただけで加藤清正は1597年11月に忠清道から撤退し、南部の慶尚道の蔚山で拠点確保をはかろうとしましたが明・朝鮮連合軍の包囲により苦戦、弾薬や食料・水にも困窮し飢餓状態の戦闘を続けました。

「同四日にはやゝ船より我も人もおとらしまけしとて物をとり人をころし、うはひあへる骸、なかなか目もあてられぬ気色也」
「同六日二野も山も、城は申すにおよばず皆ふきたて、人をうちきり、くさり竹の筒にてくひをしハリ、おやハ子をなけき予ハ親をたつね、あわれなる骸、はしめてミ侍る也」
「同八日にかうらい人子供をハからめとり、おやはうちきり、二たびとみせず。たがひのなげきハさながら獄卒のせめ成りと也」

慶念『朝鮮日々記』

豊後（大分県）臼杵の出陣した大名から渡海従軍を命じられた安養寺の僧・慶念は戦場の光景を赤裸々な記録として残しました。これは再度の侵略戦争（丁酉再乱）の釜山付近での情景です。また全羅道南原の攻防戦では「一六日二城の内の人数男女残りなくうちすて、いけ取り物ハなし。（中略）無残やな知らぬうき世のならひとて、男女老少死してうせけり」

鼻きりと鼻塚〔耳塚〕 供養大施餓鬼



京都韓国人耳・鼻塚慰霊祭 2014年11月13日 京都市東山区

京都東山区には通称「耳塚」とよばれる史跡があります。この場所の直ぐ東には秀吉を祀る豊国神社がありますが、戦国～江戸時代には巨大な京都大仏殿がありました。耳塚と大仏殿はいずれせよ秀吉が建てさせた建造物です。秀吉は朝鮮での戦功の証として朝鮮側の大将は首をそのまま「其外ハ悉ク鼻ニシテ塩石灰ヲ以テ壺ニ詰入、南原五十余町ノ絵図ヲ記シ、言上目録ニ相添テ日本へ進上ス」という記録にあるように実はこの場所に埋められているのは「鼻」なのです。また数多くの「鼻請取帳^{はなうけとりちょう}」という史料が残っていて、「耳請取り」というものは見つかりません。だが戦争が終わり、江戸時代になると、大仏殿とこの塚は観光名所となり、その呼び名も次第に「耳鼻を埋め」となり、とうとう「耳塚」に変わってしまいました。明治以降はまたこの塚が秀吉が「皇威を海外に輝かした遺跡」としてもてはやされるようになりました。近年では本来の「鼻塚」というべきだ、という研究者の意見が参照されるようになっています。

高德寺、端の坊のこと



高德寺本堂



「高德寺由緒書」 所蔵:久留米教区 高德寺

高德寺は現在の佐賀県唐津市にある真宗大谷派の寺院です。その『由緒書』によると、織田信長の家臣であった奥村某が本能寺の変ののち、本願寺の教如上人に帰依して真宗門徒となり、海外布教を発願していたところたまたま釜山に一道場をひらくことを得た、とあります。慶長3年に一度帰国した際に、教如上人から「朝鮮国釜山海高德寺常住物也」という宛書きと「親鸞聖人御影」を賜った、とされます。豊後臼杵の安養寺慶念も慶長の役のとき釜山に上陸して、この道場をたずねています。慶念はその時のことを「御道場の御入候とうけたまはりて、たつね参りけれハ、まことに殊勝ありかたく御本尊さまをあんしんめされ、御坊さまの御下と御物語候御すかたを、つくゝとおかミ奉りて・・・」と記しています。この道場は日本軍の撤退時には閉鎖されたようですが、1601年には再興の許可があって唐津の地に新しく道場が開かれたようです。

二、朝鮮通信使と京都

秀吉の死とともに戦争は終わりました。だがすぐに国交が回復したわけではありません。しかし朝鮮との交易で生活が成り立ってきた対馬の島主は一刻も早い貿易の再開を望んでいました。朝鮮側も国土は荒廃し、無数の人々が亡くなり、また数万とも言われる民衆が日本へ拉致されていました。そこで1604年の末、松雲大師とよばれた僧侶を対馬へ「探賊使」として派遣しました。対馬島主は早速、徳川家康に大師の来島を伝え、翌年3月に家康と大師の会見が実現しました。会見の場所は伏見城、大師の宿舎は上京の本法寺でした。家康はこの会見の時「私の軍勢は朝鮮に出兵していなかった。^{あだ}讐も恨みもない。和を請う。」と語りました。この家康の言質を大師は国王に報告しました。その結果1607（慶長12）年に第1回目の朝鮮からの使節団500名が「回答兼刷帰使」の名で来日しました。家康からの国書に対する朝鮮国王の回答と被虜の人びとの送還が任務でした。2度目の使節団は1617（元和3）年、二代將軍秀忠は京都伏見城で使節団と会見して国書の交換を行いました。この時、秀忠と朝鮮側の正使たちは互いに「誠信の交わり」をしようとのべました。そして秀忠は一行を温かくもてなしました。

この時も日本各地に多くの被虜の人びとがいました。京都も例外ではなく、一行の宿舎であった大徳寺へも彼・彼女たちがたずねてきました。使節団とともに帰国を決意した人もいれば、日本の主人が帰国を許してくれない人、帰っても暮らしの見通しがたたない、あるいは日本人と結婚して子どもが生まれた人、戦後20年も経過して母国の言葉を忘れてしまった人など、さまざまでした。現在の在日コリアンと同じ状況が400年前にもあったのです。また既に日本で亡くなった人も少なくありませんでした。

1636（寛永13）年以降、朝鮮の使節団は「通信使」という名称に復帰しました。

いわゆる「戦後処理」が一段落したからです。以後1811（文化8）年まで朝鮮通信使を將軍家の慶事にあわせて招待することが慣例となりました。幕府にその送迎と沿路での接待と饗応を命じられた各藩は競って丁重にもてなまし

た。宿館は大きな寺院や臨時の「お茶屋」があらわれます。京都の場合、大徳寺が3度、本能寺が1度、そして本国寺が7度でした。堀川六条にあった本国寺は法華宗の寺院です。大坂では主として西本願寺津村別院、江戸では主として東本願寺浅草別院が充てられました。使節団には一流の学者、書家、画家、医師などが加わっていましたから、一行の宿泊場所等には多くの日本人の学者や画家、医師などが毎夜のように押しかけて詩文の応唱や漢字による筆談、自分の書に讀や揮毫を求める人、医学問答をする人などが現われました。一行のある学者は、鶏鳴の頃まで日本人たちの求めに追われた、と記録しています。京都ではいくつかの「洛中洛外図」に朝鮮通信使が描かれています。また1719（享保4）年に来日した学者・申維翰^{シン・ユハン}は対馬藩の学者で江戸までの往復の途次に対馬藩の学者・雨森芳洲と交流を重ねました。芳洲はのちに『交隣提醒』という書を残しました。その中で芳洲は、たがいの文化・風習のちがいを認めあうことの大切さ、また外交や交易にあたっては「争わず、偽らず、真実を以って交わり候を誠信の交わりと申し候」とのべました。また同年、当時京都にもあった大仏殿での対馬藩主の招宴を朝鮮側が「秀吉の作った大仏殿での招きは断る」と言いだしたときに、たいへんな苦勞して説得にあたりました。芳洲はのち大仏を「仏の功德は大小にあるまじく」「秀吉の暴戾」を思いださせるだけではないか、と鋭く指摘しました。

朝鮮通信使を迎えることは1811（文化8）年を最後として途絶しました。その頃になると日本、朝鮮とも国の財政事情が窮迫しはじめ、巨費を必要とする通信使の往来が財政上の重荷となってきたこと、また飢饉、洪水などの天災が相次ぎ、民衆の生活も困難をきわめるようになってきたこと、などで延期に延期をかさねるようになりました。しかし朝鮮の朝廷も日本の幕府も最後まで通信使の往来を計画してはいました。

そしてこの間、約200年、日朝両国はもちろん、東アジアではとりたてて大きな戦争もなく、平和共存、対等交流が続きました。そのことの意義はとても大きいといえます。

復交の立役者－徳川家康と「探賊使」松雲大師の果たした役割



松雲大師肖像画

松雲大師（1544～1610）

『四溟堂松雲大師』 松雲大師顕彰会編

1605年3月、家康と松雲大師・^{ソウンデサ}惟政は伏見城で会
見し、家康は「徳川は朝鮮に一兵たりとも送っていない。
^{あだ}讐も怨もない。和を請う」とのべて復交の意思を明確にし、
被虜人送還に全力を注ぐよう諸大名に伝える、と約束しま
す。松雲大師はこの言質を直ちに国王に報告し、朝鮮側
は復交の条件を明確にします。それは家康からの謝罪国
書の送達と戦中に王陵の墓をあばいた犯人の護送という
ものでした。対馬は早期の国交回復を急ぐあまり、家康
の国書を独断で偽造、また偽犯人をソウルに送ります。朝
鮮側はそれらを対馬の偽作と見抜きながら、2条件は満
たされたものと政治的に判断して、1607年に第1回
回答兼^{さつかんし}刷還使を日本へ送りだしました。戦後はじめての約
500名の大使節団は対馬の武士たちに警護されて江戸
に到着し、家康の跡を継いだ二代將軍秀吉と会見して両
国の国書を交換しました。戦争終結後10年、ようやく両
国の間に平和が戻りました。

「洛中洛外図」屏風にみる朝鮮通信使と民衆



洛中洛外図屏風(今井町本)・部分 個人蔵 下図も同じ

1636年から使節団の名は正式に「通信使」となり、將軍代替
わりの時などに日本側の招請により来日してきました。それで「来聘
使」ともいいます。京都での滞在は往復とも2～3日が通例でした。
しかし江戸時代前半の京都を描いた「洛中洛外図」屏風には10数
点に朝鮮通信使の行列が描かれています。この年以降、常例の宿舎
となった本国寺や京都大仏殿付近の一行の姿を描いた作品もありま
す。とりわけ「今井町本」とよばれているものは、油小路を北進す
る一行の大行列と家々から身を乗り出し、楽しそうに見物する京都の
民衆の姿が見事にえがかれています。往復約8か月を要した一行の
供応や接待の体制づくりに各地の大名や民衆の負担は大きいものでは
ありましたが、それでも一生一代の異国情緒に触れる機会として、
民衆が通信使を心まちにしていたことが偲べれます。



京都大仏殿での饗応ともめ事



洛中洛外図屏風(光明寺本)・部分 大仏殿と朝鮮通信使 所蔵:光明寺 岐阜市

写真提供:岐阜市歴史博物館

江戸からの帰りの際、東山区の京都大仏殿で、対馬藩が一行をもてなすことが慣例でした。(左図参照) 多くの場合、通信使一行はそれを受け入れていましたが、1719年の一行はそれを断る、と言いだしたのです。理由はその大仏殿は秀吉が発願・建立したものであり、100年が経過していても永遠の^{あだ}讐の願堂である大仏殿の供応は受け入れられない、というのです。対馬藩から一行の護送役(真文役)であった雨森芳洲らの必死の説得の結果、その時の饗応はなんとか実行されたものの、次回からその行事は中止となりました。のちに芳洲は秀吉のはじめた壬辰戦争を「無名の師」「両国無数の人民を殺害」した「暴悪」であると断じています。それはこの時に苦労したことへの反省がもたらした結論であったかも知れません。

雨森芳洲の「交隣提醒」に学ぶ



雨森芳洲肖像画

所蔵:東アジア交流ハウス

芳洲会 滋賀県長浜市高月町

雨森芳洲(1668~1755)の先祖は近江湖北の長浜市高月町の豪族。芳洲の生まれははっきりしないが父は京都で医業を営んでいました。22歳のとき師の木下順庵の推挙で対馬藩に仕官、のちに「朝鮮方佐役」として重く用いられました。朝鮮語・中国語をよくし、通算7回、藩命で釜山へ渡海。朝鮮側役人の信頼も得ました。1711年の通信使来聘の時は家宣將軍の側近だった新井白石と將軍の称号をめぐる大論争をしました。対馬藩と朝鮮側との外交担当者としての多くの仕事のほかに、困難な藩財政の再建方策や対馬での朝鮮語通訳養成所設立の急務を藩主に献策、後者は芳洲の晩年実現しました。芳洲の「全一人」はその教科書で『交隣須知』は語彙集です。

誠信の交と申す事、人々申す事
二候へども、多く八字義を分明
二仕らざる事これ有り候。誠信
と申し候ハ、実意と申す事にて、
互二欺かず争はず、真実を以て
交り候を、誠信とは申し候。朝
鮮とまことの誠信の交りを取り
行わるべきと思召し候二成り候
てハ、送使をも尽く御辞退成さ
れ、すこしも彼国の造作二御成
り成されず候時ならてハ、まこ
との誠信とハ申し難く

『交隣提醒』 所蔵:東アジア交流ハウス 芳洲会

『交隣提醒』は雨森芳洲が61歳のとき、藩主に提言した「対朝鮮心得帳」ともいべき書物です。彼はこの書のなかで、次の諸点を強調しました。まず第一は「相手の人情事勢」を知ること。日本と朝鮮は「風義・嗜好も違い、自己の風義で相手と交わ」っては誤解や偏見を招くだけだ、として文化の違いをまず認めあうことが出発点だ、とのべています。さらに無用な駆け引きをやめ、「真実の心」をもってまじわるこそが「誠信」の交わりだ、と強調しています。こんにちいわれる「多文化共生」論の先駆け、というべきでしょう。彼はこれらの考えを観念からひきだしたのではなく、多年の朝鮮の人びととの交流の実践から導き出したのです。そこに芳洲の思想もつ意義がある、といえましょう。

三、近代の日朝・日韓関係

(1) 明治維新から日清戦争まで

日本は江戸時代に朝鮮との間に対等な関係を結んでいましたが、維新後の明治新政府は朝鮮を日本より一段低い国として扱いました。中国の皇帝を意味する「皇」の文字を書き込んだ文書を朝鮮政府に受け取らせようとし、また日本が欧米列強との間で結んだ不平等条約と同じ内容を持つ「日朝修好条規」（江華条約、1876年）を朝鮮との間で結んだことにそれは表われています。この時期、大谷派による朝鮮開教も始められました。

1880年代には清国が朝鮮に影響力を持っていましたが、日本は朝鮮半島を「利益線」と位置づけて、影響下に置こうとしました（1890年山県有朋意見書）。1894年、朝鮮半島南部で民族宗教「東学」の組織を中心とする農民が大規模な反乱を起こすと、日清両国は朝鮮に軍隊を送りました。農民軍が政府との間で和平に合意すると、清国軍は撤退の意向を表明しましたが、日本政府は朝鮮政府に「内政改革」要求を突きつけるとともに朝鮮王宮を軍事占領し、さらに清国軍を攻撃しました（日清戦争）。日本軍は清国軍と戦う一方で、日本に抵抗する農民軍を「殲滅」（皆殺し）する作戦を展開しました。

(2) 日露戦争と韓国併合

日清戦争の勝利によって、日本は朝鮮に対する影響力を強めましたが、朝鮮ではこれに反対する義兵闘争が起こり、さらに権力を握る王妃閔氏（明成皇后）らは日本の要求を拒否する姿勢を示しました。1895年10月、日本の公使・駐屯軍そして大陸浪人らは閔妃を政権から除くため、王宮に押し入って閔妃を惨殺しました。近年の研究では、この閔妃殺害計画には出先機関だけでなく日本政府要人も関与していたとされています。

この事件のため、日本の影響力は一時後退することとなり、ロシアが勢力を伸ばしました。日本では朝鮮半島がロシアの勢力圏に入ることを極度に警戒する見方が強まり、日露戦争を起こしました。韓国政府（1897年に国号を大韓帝国に改称）は「局外中立」を宣言しましたが、日本はそれを無視して朝鮮を軍事占領し、戦争への協力を約束させる協定を韓国政府に押し付けました。

ロシアとの間に講和条約を結んだ日本は、その

直後、軍事力を背景に「第二次日韓協約」（保護条約）を朝鮮に強要し、外交権を奪い取りました（1905年）。そのために設置されたのが統監府であり、初代統監に伊藤博文が就任しました。伊藤は、統監在任中、朝鮮の内政にも干渉し、日本の支配権を拡大しました。日本の侵略に抵抗する朝鮮人によって義兵闘争や愛国文化運動が展開されましたが、日本は軍隊の力でこれらを抑えました。

1909年10月、伊藤はハルビンで安重根によって射殺されましたが、伊藤は生前に韓国併合方針に賛成しており、それに沿って大韓帝国の統治権を日本の天皇に譲り渡すという形で、1910年8月、韓国併合が実行に移されました。

一方日本国内において、社会主義者に対する弾圧事件の大逆事件がおこったのもこの年でした。

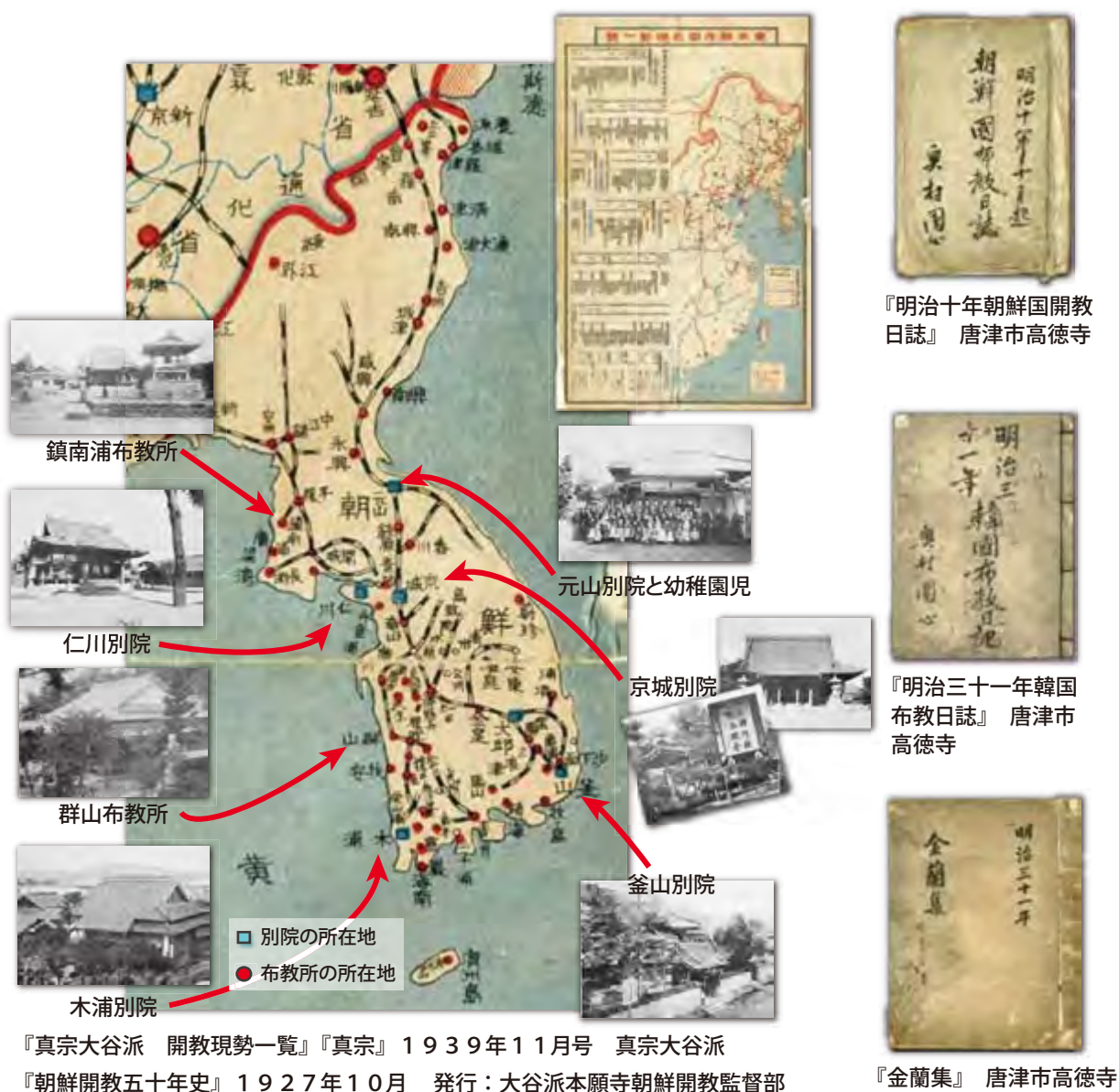
(3) 日本の朝鮮植民地支配

朝鮮を支配するために朝鮮総督府が設置されました。その長である総督は天皇に直属し、立法・行政・司法・軍隊統率の権限を有していました。これによって朝鮮は日本「内地」とは異なる法律・政治体制の下に置かれました。官僚・警察官・教員なども日本人によって占められ、朝鮮人は低い地位しか与えられませんでした。

1910～45年の植民地支配は、10年代の「武断統治」、20年代・30年代前半の「文化政治」、30年代後半～45年の「皇民化政策」の3つの時期に分けられます。憲兵が警察を兼ねた「武断統治」期には、朝鮮人の結社・集会・言論などの活動はほぼ完全に抑えられました。「土地調査事業」など、朝鮮の経済・社会を日本に従属させる政策が推進されました。朝鮮の独立を求める三一運動が起こった後、支配政策を手直した「文化政治」期には、団体の結成、朝鮮語新聞の発行などが認められるようになりましたが、それは植民地支配を否定しない範囲で認められたものにすぎませんでした。

満洲事変に続く日中戦争・アジア太平洋戦争の時期には、朝鮮人に「皇民化」（皇国臣民化）を強要するさまざまな政策が行なわれました。日本語常用、創氏改名、志願兵制度、強制連行・強制労働、軍隊慰安婦、徴兵制度など、日本の戦争遂行のために朝鮮民族の文化を否定し、生活や生命までも奪い去るものでした。

真宗大谷派の朝鮮開教



『真宗大谷派 開教現勢一覽』『真宗』1939年11月号 真宗大谷派
『朝鮮開教五十年史』1927年10月 発行：大谷派本願寺朝鮮開教監督部

『金蘭集』 唐津市高德寺

日本は、朝鮮との間に起きた武力衝突事件である江華島事件(1875年)の後、「日朝修好条規」(1876年2月)を締結、朝鮮に対して治外法権をもち、関税自主権を奪い、釜山、元山の二港を開港させました。翌年、大久保利通内務卿と寺島宗則外務卿からの依頼を受け、東本願寺の法主・巖如は朝鮮開教に着手します。1877年8月16日奥村圓心に朝鮮国出張を命じ、翌月に奥村ら2名が釜山に向かいます。釜山では、旧対馬使の対面所を借用修築し釜山布教所を開設。在留邦人のための小学教育や、貧民救助や行路病者救護を目的とする「釜山教社」を創立。翌年、釜山別院と改称し初代輪番に奥村圓心が就任しました。

奥村圓心は佐賀県唐津市高德寺の出身で、豊臣秀吉の時代、朝鮮に渡り釜山海高德寺を創設した奥村浄信の後裔といい、後に愛国婦人会の初代会長となった奥村五百子の兄でもありました。当時、釜山の日本人居留民は300名ほどに過ぎず、布教の対象は主として朝鮮人でした。布教の内容は「我王法為本忠君愛国の教を以て彼国民を誘導啓発するは実に我教の本旨」(『朝鮮開教五十年史』)というもので、明治国家の方針に沿うものでした。当時の記録として、奥村圓心の日記『明治十年朝鮮国開教日誌』、『明治三十一年韓国布教日誌』、教化を受けた朝鮮人が記録した『金蘭集』が残されています。

その後、大谷派は元山(1881年)、仁川(1885年)、京城(ソウル・1890年)と次々に布教所を開設しました。『真宗』1939年11月号に掲載された「開教現勢一覽」には、「別院6・末寺5・布教所58・学校2・布教者182名」と記録されています。

水雲教の帰属と抵抗



『彌陀教典制』（1936年頃）



水雲教の得度式

『真宗』1937年4月号

1937年1月24日、水雲教の教主李象龍はじめ信徒5千人が大谷派に帰属願いを出し、3月16日に教主ほか幹部13名が得度式を受けました。当時、朝鮮半島では「寺刹令」（1911年6月3日発令）により認められた仏教寺院以外の宗教、天道教、侍天教・普天教など70近くにのぼる宗教は、宗教類似団体（類似宗教）と呼ばれ、「保安法」（1907年発令）、警務総監部令「集会取締に関する件」（1910年）によって嚴重に取り締まられました。朝鮮独自の民族宗教である「東学」の流れをくむ水雲教も「類似宗教」の一つと位置づけられ、厳しい監視下に置かれました。日本国内でも「大本教」、「人の道教団」への取締りが行われ、その影響が朝鮮半島にも及び類似宗教撲滅政策はますます強くなりました。

1936年6月、大田警察署高等係から「類似宗教は解散させることになった。水雲教は教理が仏教に近いから仏教に改宗すれば認定できるが、現在の水雲教では認定できない」と命令され、やむを得ず「彌陀教」に改称した後、1937年、真宗大谷派に帰属することになりました。

真宗大谷派の側では、「（水雲教は）偶々当局よりも熱心に内地仏教帰属をすすめられ且つ同宗派内にも朝鮮仏教に行きづまりを感じて（略）内地仏教、殊に真宗の教義の深遠なるに感じ、衷心より東本願寺に帰属を決意した」（『真宗』427号）という認識しかありませんでした。

水雲教は真宗大谷派のもとで、九年間抑圧と統制を受けます。その間も水雲教の信徒たちは形式的に従っただけで、実際には日本仏教を信仰しませんでした。信徒の中には、信仰を守った罪で西大門刑務所に収監されて、酷烈な拷問にもかかわらず水雲教信仰を棄てなかった者や獄死した者もいました。戦後、水雲教は大谷派を離れ、独立の教団として再生し、現在に至っています。

朝鮮における監獄教誨と大谷派



現在の西大門刑務所歴史館

西大門刑務所は現在、刑務所という空間を通して朝鮮の近現代史を学ぶことのできる「西大門刑務所歴史館」になっています。



朝鮮の刑務所で教誨師を務めていた大谷派僧侶の論文「朝鮮に於ける思想犯罪者とその教化」（『教誨研究』）

「監獄教誨」とは、刑務所・拘置所に収監されている囚人に精神的・宗教的教化を施し、罪を悔い改めさせることをいいます。日本では明治以降、主に東西本願寺が監獄教誨を担当しましたが、植民地の朝鮮や台湾における監獄教誨も東西本願寺が独占的に担当することになりました。大谷派や本願寺派にとっては、朝鮮での布教が成功しなかった中で、監獄教誨は朝鮮の民衆に直接「教え」を伝える機会となったといえます。

大谷派は、数多くの独立運動家が投獄されていたソウル（当時京城）の西大門刑務所をはじめとする刑務所に教誨師を派遣し、彼らに対する教化を行ないました。独立運動などの容疑で投獄された人びとに対する教誨は、日本の朝鮮支配を受け入れさせること、民族意識を捨てさせることが主な目的でした。

たとえば、1939年9月に京城南山の本願寺で開かれた大谷派教誨師・保護司協議会では、日中戦争下の朝鮮の監獄教誨において何に重点を置くかが話し合われました。その中では、朝鮮人受刑者に「日本人としての自覚」「時局認識の徹底」「肇国理想の生活化」「内鮮一体の歴史的事実の提示」「国語普及」を図るなどの意見が出されました。

四、未来に向けてーともに生きるー

日本がアジア太平洋戦争に敗れ、朝鮮半島は解放されました。しかし、植民地支配による傷跡は深く、今も様々な課題が残されています。1965年の日韓条約により、韓国は韓国民の被害に対する国家としての請求権を放棄しました。しかし韓国民が個人として持つ、請求権は、日韓条約によっても失われていません。また、韓国内に居住していなかった在日韓国人の請求権は、日韓条約では棚上げにされており、解決していません。日本軍「慰安所」制度のもとで韓国人女性が受けた被害は、韓国においても根強かった女性差別が背景となり議論の俎上にあげられていません。

朝鮮民主主義人民共和国との間では、植民地による被害の賠償問題は、いっさい手つかずのまま残されていることも忘れてはなりません。

戦後も日本での在留を余儀なくされた在日コリアンに対し、日本は植民地時代そのままの差別と抑圧を加えました。日本国籍を一方的に剥奪し、外国籍者として無国籍状態で戦後社会に投げ出したのです。

このようななか日本では、1970年代以降、在日コリアンによって民族差別撤廃を求める声があがりました。80年代には、韓国民による植民地被害に対する損害賠償請求訴訟が相次ぎました。90年代に入ると、かつて日本軍「慰安婦」を強要された韓国人女性が相次いで実名で名乗り出て、謝罪と補償を求めました。時を同じくして、日本軍の軍属として障害を負った在日コ

リアンによる戦後補償を求めるとりくみも始まりました。

被差別の実態、被害の実態に真摯に向き合った多くの日本人が参加したことで、民族差別撤廃運動、戦後補償運動は高揚しました。ともにとりくみをすすめ、多くの課題を解決してきたことで、朝鮮半島の人々、在日コリアンと日本人とが、信頼関係を取り戻し、共生と友好の関係を築いてきたといえるでしょう。

一方、ここ数年来、在日コリアンに対する、「ヘイトスピーチ」（差別煽動表現 / 行為）と呼ばれる剥き出しの差別と、それらを煽動する行為が深刻な社会問題となっています。あまりにも酷い「ヘイトスピーチ」が放置され、警察や行政の許可を受けて続けられてきたことで、在日コリアンの間には日本社会に対する不信感が広がりつつあります。「ヘイトスピーチ」に対して路上で声をあげ、反差別と共生を訴える「カウンター」と呼ばれる人々がいます。市民の必死の努力が、在日コリアンの日本社会への信頼をギリギリのところで繋ぎとめているということできるでしょう。

しかし、日本政府による対応は鈍いままです。それどころか政府と閣僚らによる過去の歴史を否定し、在日コリアンの生活実態と差別の現実を無視した発言や政策が繰り返されています。ヘイトスピーチを許容する国と社会の制度、しくみを変えていくことで、真の多民族共生社会を築くことができるのではないのでしょうか。

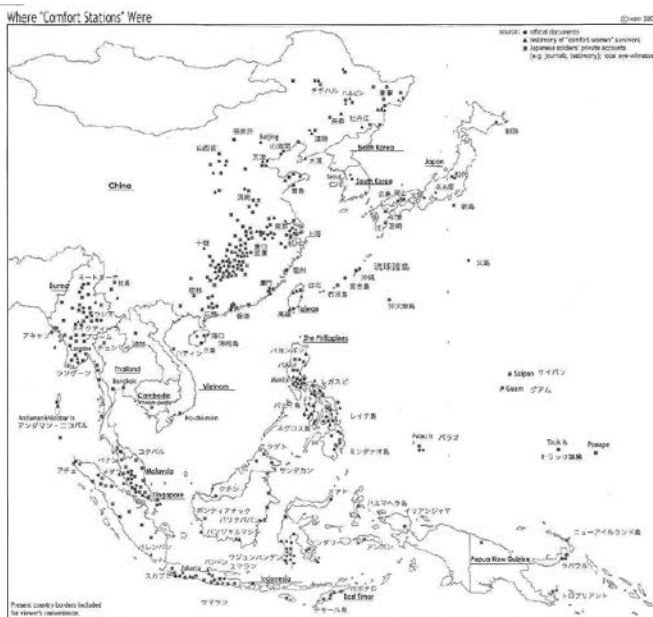


連れて行かれる
金順徳（キム・スンドク）



責任者を処罰せよ - 平和のために
姜徳景（カン・ドクキョン）

日本軍「慰安婦」問題



日本軍慰安所があった場所
アクティブミュージアム女たちの戦争と平和資料館

日本軍「慰安所」制度とは何だったのか

日本軍が「慰安所」を設置したのは兵士が性病に罹患し、兵力が損なわれることを防止するためだった。「慰安所」では日本、朝鮮、中国などの女性が日本軍兵士の性欲処理の相手を強いられた。女性たちは人身売買の被害者、甘言や脅迫によって「慰安婦」を強いられた人も多く、なかには未成年も含まれていた。女性たちには、居住の自由、外出の自由、自由廃業の自由、拒否する自由が認められておらず、実態として「性奴隷」の状態だった。「慰安所」には軍が直接設置したものもあったが、民間業者を利用したものが多かった。しかし民家業者の慰安所であっても、戦場への「慰安婦」の輸送、女性たちの性病検査などの管理には日本軍が直接的に関わっていた。第2次世界大戦以前、同様の施設の設置と管理に軍隊が関与したのはナチス政権下のドイツを除き他に例がない。営利、わいせつ目的での誘拐、国外移送目的での略取や誘拐、その被害者を日本国外に移送することを禁じた戦前の刑法（第三章）、1904年から21年まで相次いで成立した三つの条約からなる「婦女売買禁止に関する国際条約」（日本は25年に批准）に違反した状態にあった女性たちの奴隷状態を知りつつ放置し、「慰安所」の設立と運営に関与し続けた日本軍（日本政府）の責任が問われている。

外国人登録法の指紋押捺拒否運動



① 指紋押捺欄のある外登証



② 最初に指紋押捺拒否をした韓宗碩さんの外登証

① 指紋押捺欄のある外登証

1984年、兵庫県内の自治体で当時16歳だった韓国籍の在日コリアン3世に交付されたもの。当時日本で出生した外国籍は、16歳の誕生日までに本人による初回登録をおこなうことが義務づけられ、その際、左手人差し指の回転式指紋が採取され、登録されていました。82年の法改定まで、初回登録は14歳でした。真っ黒なインクを指につけて指紋押捺を強えられることは、在日コリアンに日本社会における従属的立場、二級市民としての立場を屈辱とともに刻みつける行為でした。

② 最初に指紋押捺拒否をした韓宗碩さんの外登証

右は、1980年、韓さんに交付されたもの。指紋押捺を拒否したことが「指紋欄」と「指紋事項欄」によってわかります。押捺拒否について韓さんは「1980年9月10日、私は外登証の切替のために訪れた東京都新宿区役所で、私は良心に基づいて、何の必要もない犯罪人の烙印は、金輪際拒否するとして指紋押捺を拒否した。誰にも相談はしなかった。逮捕される覚悟を固めて拒否をした。これ以来私は、外登証の切替もしていないし、登録証も受け取っていない」と証言しています。

京都朝鮮第一初級学校襲撃事件



襲撃当時の写真

京都朝鮮第一初級学校は、京都市南区に1946年に京都七条朝聯学院として設立されました。幼稚園を併設した小学校で、100名を越える園児・児童が在籍していました。2009年12月、10年1月、3月の3回にわたり在日特権を許さない市民の会（在特会）メンバーが、園児・児童が授業中の学校を襲撃し、「スパイの子ども」「キムチくさい」などのヘイトスピーチを大音量でなげ立てました。学校側の通報をうけて駆けつけた警察は制止することなく、襲撃が続けられました。この襲撃後、園児・児童の中に、夜泣きや夜尿症が再発したり、拡声器の音に怯えるなどのPTSD（心的外傷後ストレス症候群）の症状が現れました。身体的な被害が発生している点から、この事件はヘイトスピーチ（差別煽動表現／行為）を越えたヘイトクライム（人種的憎悪にもとづく犯罪）といえることができます。

こるむ通信（支援運動機関誌）

「こるむ」とは、朝鮮半島の民族衣装・チョゴリを結ぶ紐のことです。在特会による襲撃事件に対して、2011年6月に朝鮮学校が損害賠償請求と差別発言の処罰を求めて提訴しました。その裁判闘争を支援する市民グループの名称が「こるむ」と名付けられました。襲撃事件を巡る裁判では、2011年4月、襲撃事件の主犯4名に対する刑事訴訟で、いずれも執行猶予付の有罪判決が下され確定しました（控訴した一人の有罪は、翌年に確定）。民事訴訟では、2013年10月に在特会側に対して1200万円超の賠償金の支払いを命じる判決が下されました。判決では、在特会による襲撃事件が「政治的主張」の一環であったとする主張を退け、人種差別行為であり容認できないと断罪しています。更に高額な賠償金を命じた理由を、日本が加入している人種差別撤廃条約によって求められる責務を履行するため、一般的な犯罪に較べて処罰を重くしたと説明しています。2014年7月に大阪高裁で、一審判決を維持し、更に朝鮮学校の民族教育権にふれた判決が下されました。



横断幕「ヘイトクライムのない社会を」

提供：在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会（こるむ）

京都朝鮮学校襲撃事件の裁判支援のとりくみのなかで掲げられた横断幕。集会やデモ行進などで活用されています。色鮮やかな手形は、襲撃を受けた朝鮮学校の園児・児童・生徒たちのもの。

ヘイトスピーチとカウンター



仲良くしようぜパレード2014（写真）

2013年7月、大阪で1回目の「Osaka Against Racism 仲良くしようぜパレード in 大阪」（以下「仲パレ」）が開催されました。ヘイトスピーチに対するカウンターを毎週のようにおこなっていた人びとのなかで、ある在日コリアン3世の青年の「こういうの（カウンター）じゃなくて、平和の行進がしたいねん」というつぶやきがきっかけとなって企画されました。700名の参加者を得た仲パレ2013は同年、東京でも「差別撤廃東京大行進」として開催されました。2014年7月、再び大阪で仲パレ2014が「ミドウスジ セレブレイト ダイバーシティ」と題し、1500名が参加しておこなわれました。毎週のようにヘイトスピーチによって汚されてきた大阪の街にとって、参加者の一人ひとりが訴える人種差別反対と共生のメッセージが響きわたる、かけがえのない一日となりました。

高等学校無償化措置から朝鮮高級学校を 除外しないよう求める宗務総長コメント

このたび、すべての高等学校の授業料を無償化する法案が国会に提出されたことは、公立、私立の学校だけでなく、「日本の社会全体で広く学びを支える」という理念から、高等学校段階に該当する外国人学校の生徒についても同等額を支給するという画期的な措置であり、その趣旨に賛同するものであります。

しかし、内閣は、当面この高等学校無償化制度の対象から、朝鮮高級学校を除外するという報道に、大きな不安を感じざるをえません。

今回は、各種学校に位置付けられているインターナショナルスクール、中華学校、韓国学校などには無償化制度の適用を予定されておられるようです。65年前、敗戦直後から、日本に残った朝鮮人たちは自らの民族の文化伝統を子どもたちに教育するため、自身の力で学校をつくり28都道府県で各種学校として認可を受けています。

もしこのたび高等学校無償化対象から10校の朝鮮高級学校を除外することになれば、教育の機会に差別を生じ、朝鮮学校で学ぶ子どもたちの「学び、育つ権利」を大きく阻害することになると思われます。

日本も批准している子どもの権利条約では、「児童又はその父母若しくは法定保護者の人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治的意見その他の意見、国民的、種族的若しくは社会的出身、財産、心身障害、出生または他の地位にかかわらず」いかなる差別も禁止しています。

私たちは在日朝鮮人の歴史と、現在もかかえる問題を軽視してはなりません。

高等学校無償化を朝鮮高級学校に適用しない措置は、排外主義を増幅させ、閉塞した社会をつくることにつながりかねません。

「四海のうち、みな同朋」という宗祖親鸞聖人のみ教えに基づき、多様で豊かな文化を認めあい、共に生きあえる、平和で平等な同朋社会が実現することを希求いたします。

高等学校無償化措置を、一部の例外なく実施されることを切に要望いたします。

2010年3月19日

真宗大谷派宗務総長 安原 晃

高等学校無償化は、OECD加盟国30カ国のうち、26カ国で実現されています。
日本では、現在でも朝鮮学校は無償化の対象から除外されています。



朝鮮通信使来日400周年 京都再現行列

写真提供：韓国民団京都府本部

